第9章

この町と、人と

東日本大震災から、8年以上が経過した。
今も大槌町で生きる人たちは、あの日に何を思い、
そして今、どのように過ごしているのか。
一人一人の言葉に耳を傾けた。
ここに登場する16人の町民にインタビューしてくれたのは
同じくこの町で暮らす大槌高校の生徒たちである。

町文化交流センター「おしゃっち」で、震災の現実に向き合った町民にインタビューする高校生たち（2018年8月8日撮影）

大槌高校生が聞いた16人の東日本大震災

この町で生きていく

今回の取材・撮影に参加した大槌高校復興研究会の生徒

佐々木 朱里（1年）
瀬戸 翼（1年）
中村 海鈴（1年）
野﨑 悠矢（1年）
藤社 彩乃（1年）
菅野 雅也（2年）
櫻井 ことみ（2年）
佐々木 加奈（2年）
佐々木 慎也（2年）
前川 菜緒（2年）
六串 香穂（2年）
八幡 有香（2年）
山﨑 大陽（2年）
山﨑 光（2年）

※学年は取材当時

大槌高生が取材、撮影

「町民の声を集め、町民も参加する」――。この震災記録誌の大きなテーマの一つだ。

2011（平成23）年3月11日の東日本大震災。あの日以降、大槌町で何が起きていたのか。そして、そこで暮らす人たちはどんなことを考え、どのように行動したのか。ここから始まる、あの震災を乗り越え、今を生きる町民の実像に迫るインタビュー企画「この町で生きていく」。これらの取材・撮影は、東北大学文学部社会学研究室の学生たちからサポートを受けた県立大槌高校復興研究会の生徒たちが担当したものである。

18（同30）年8月、町文化交流センター「おしゃっち」には、さまざまなプロフィールを持った16人の大槌町民が集まった。発災時にまだ幼かった高校生たちは、その16人に幾つもの質問を投げ掛け、同じく震災の「体験者」として、より深い部分の言葉を引き出していった。

震災後、町内180カ所で定点観測撮影を行うなど、町の移り変わりを見続けてきた大槌高校生だからこそできた取材。まさにテーマとして掲げた、「町民が参加する震災記録誌」にふさわしい内容となった。

大槌高校復興研究会

大槌町の復興に貢献し、町の現状と今後を内外に発信しようと、2013（平成25）年に生徒たちが自主的に創設。次の5班で構成する。年3回、町内180カ所で震災後の風景を写真撮影する「定点観測班」▽夏休みや冬休みに児童らの相手をする「キッズステーション班」▽主に県外から訪れる高校生らに復興状況を伝える「他校交流班」▽防災訓練の実施や復興まちづくりで提言する「防災・まちづくり班」▽同会の活動をホームページなどで紹介する「広報班」――。

全校生徒約160人のうち7割が会員。18（同30）年には町役場と震災伝承活動に関する協力協定を締結し、町文化交流センター「おしゃっち」で定点観測班の成果などを映像で紹介している。防災活動を効果的に展開する学校などを顕彰する18年度の「ぼうさい甲子園」（兵庫県など主催）の高校生部門で、優秀賞を受賞した。

取材／山﨑 大陽・撮影／佐々木 慎也

「生きていること」はどれだけありがたいか震災で気付いた〝幸せ〟

冷静に考えると、あの日、一言で言えば地獄を見たってことかな。お経の中で地獄の世界は分かったつもりだったけど、まさかこういうことが目の前で起きるなんて、これ、夢じゃないかな、いつか覚めるんじゃないかなっていうところから、お寺での避難生活が始まったの。

吉里吉里のお寺では、仏様に供えるお食事を作るためにお米を持ってくる風習があるんだよね。あの時、お米が大体150キロあって、避難所に入ってきた人は250人。当日の夜中の11時過ぎかな。ご飯を炊いて、小さいおにぎりを1人1個食べることができた。

昼間は大人たちが捜索活動とかがれきの撤去、自分の家の何かを探すとかで出て行くんだけど、残った子どもたちが、避難所の運営をすごく助けてくれたの。トイレの掃除を一生懸命やってくれたのが、中学生。その姿を見て、小学生たちがお手伝いをしてくれた。50日の間、一度もトイレが汚れることはなかった。誰が入っても次の人が気持ちよく使えるようにしてくれて、とても素晴らしかった。

吉里吉里でも、線路を境に家が流された所と残った所があったでしょ。そういう差のために、町内で支援物資の分配方法などで避難所に入った人と家が残った人とのトラブルはあったかもしれない。でも、地域全体が同じように痛みを伴っているということを忘れてはいけない。

それで、お寺がある吉里吉里四丁目の町内会の役員や民生委員にお願いして、一軒一軒回って安否確認して名簿を作ってもらった。総数だと1260人分。多い家だと1軒に25人ぐらいいたのかな。名簿を持って災害対策本部に行き、そういう家も「避難所」として認めてもらった。そして、自衛隊が撤収する7月まで、全ての家に支援物資が行き渡るシステムを作ったのね。私が言い出しっぺだから、物資をお寺にもらって、責任を持って各家に配布することを約束したの。

振り返って思うのは、生きていることがどれだけありがたいかということ。お母さんが命がけで産んでくれた命を、どう生きていくのか。自分の頭で考えて行動していくことが、どれだけ大切か。こういう学んだことを大槌の住民の財産として残してほしい。もう一つ、自然災害で命を落とすことがない町にしていかなければならない。経験を後の世代にどう伝えていくか。若い人たちに考えてほしい。

両親に感謝して生きる、家族を大切にしながら生きる。みんながそういう思いになってくださったとき、すごく幸せを感じます。本当の幸せは、人が人を思うこと。人から大切に思われるような生き方をすること。それは、誰からも奪われることのない財産だと震災の後に気が付いた。そのことをもっともっと伝えなければいけないなと思っています。

高橋 英悟（たかはし えいご）さん

1972（昭和47）年5月、宮城県生まれ。28歳の時に吉里吉里にある曹洞宗吉祥寺の第18世住職となる。震災当時、同寺に集まった多くの避難者と共に避難所を運営。発災から50日後に犠牲者の合同葬を執り行った。犠牲者の回顧録「生きた証」プロジェクトの推進協議会長や、旧役場庁舎の保存を求める「おおづちの未来と命を考える会」の会長を務める。

高校生の感想

山﨑 大陽

震災の時は小学校3年生で知らないことばかりだったけど、今日英悟さんのお話を聞いて、あの時、お寺に避難したのは英悟さんの声掛けがあったからだと分かりました。お寺が避難所として開設されていたことなど、自分が知らなかったことを知ることができた、良い機会でした。

取材・撮影／山﨑 光

地域のことは地域で決める
防潮堤、震災前と同じ6・4メートルという決断

生まれも育ちも赤浜。新日鉄釜石の関連会社に勤めていたころは、寝るだけに帰ってくるようなもんだったけど……。津波で女房を亡くし、今は娘と二人暮らし。7年間仮設にいて、つい最近、赤浜に家を再建しました。

「赤浜の復興を考える会」は、震災後の避難所で「意見のあるやつはこの指止まれ」みたいな感じで集まりました。俺もみんなも、責任感や使命感があったわけではないけれど、毎日毎日、がれきの山を目の前にしているとね。こう思うだとか、ああ思うだとか、意見のあるやつが自然に集まってきたって感じでした。

国や県から14・5メートルの防潮堤を造る話が出たのは震災の年の秋。そんなに高い防潮堤を造ってしまったら海が見えなくなる、そのことで津波から逃げ遅れるっていうのもあったけど、それは後から出てきた話だな。まずは土地の問題があった。15メートル近い防潮堤を造るってことは、その倍くらいの土台が必要になるんです。土地が広ければいいんだけど、狭い赤浜にそんなの造ったら人が住むとこがなくなってしまう。

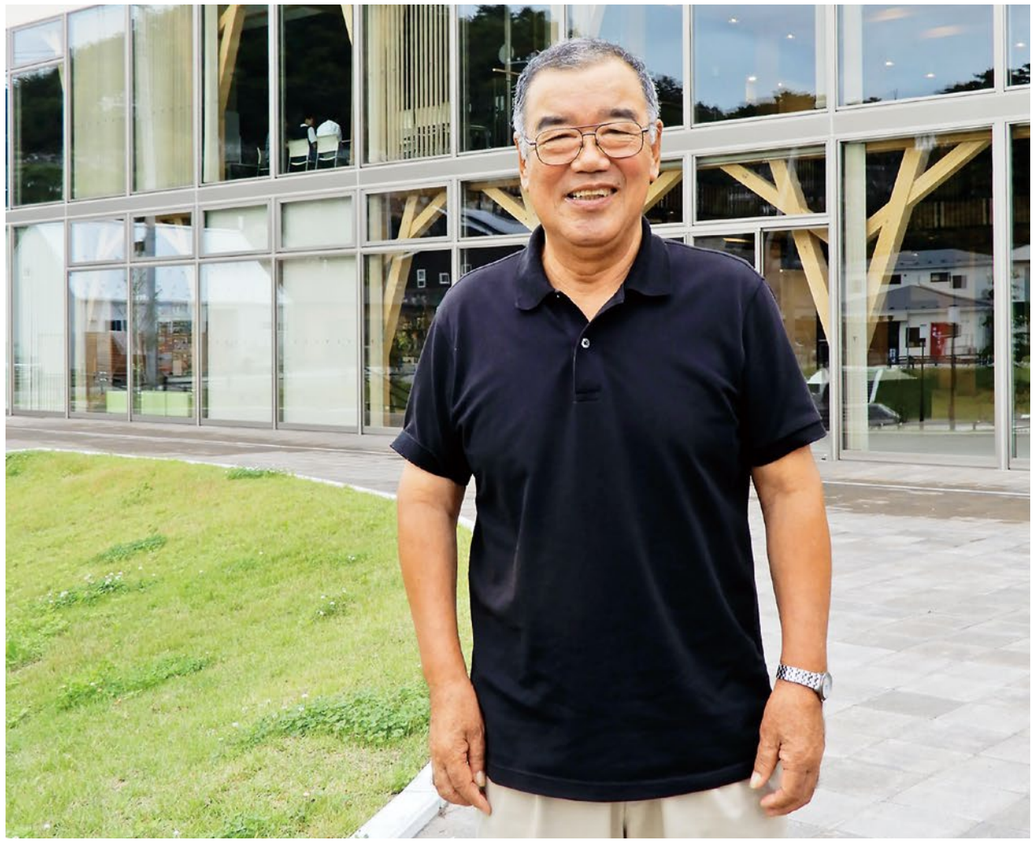
それじゃ大変だべと。それにもし15メートル以上の波が来て防潮堤を越えてしまったら、今度はその水の抜け道もない。内側に盛り土することで、土地も有効に使えるんじゃないかと。「赤浜はそうするべ」と意見がまとまりました。

もちろん、反対意見がなかったわけじゃありません。違う意見を持っていた人はつらかったと思うけれど、今はそれで正解だったと、震災前と同じ6・4メートルにしてよかったなと俺は思ってます。赤浜って所は地域柄、いろんな意見が出ても、話し合って最後はちゃんとまとまるってとこがある。ほかの地域ではあんまりないんじゃないべか。

「考える会」では防潮堤の他にも、どこどこの道路をつなげてくれだとか、道幅を広げてほしいだとか、避難所にいる人たちの声を吸い上げて要望書を町に出しました。半分も実現はしてないけど、今思い返すとある意味楽しかったかもしれないなあ。いろいろ言い合える場だったから。うん、何か、これからつくっていくっていう雰囲気がありましたね。

赤浜はもともと何があるって町じゃないし、これから大きく発展する地域でもない。でも、これまで住民みんなで仲良くやってここまで来たわけだから、それがこれからも続いていけばいいなと思ってます。特段何かが変わらなくてもいいの。みんなが穏やかに暮らしていけるこの地域が、ずっとここにあることを望んでいます。

最後に大事なものを三つ挙げろって？　赤浜と……娘だな（笑）。あとは何もねえなあ。



佐藤（さとう） 壽（ひさし）さん

1946（昭和21）年10月、大槌町赤浜生まれ。震災後避難所で立ち上げた「赤浜の復興を考える会」で、海と共に生きていくために防潮堤のあり方を考え、行政に働き掛けて震災前と同じ高さに計画を変更させる。現在は海が見える赤浜の高台に娘と2人で暮らしている。

高校生の感想

山﨑 光

防潮堤の高さについて深く質問できてよかったし、佐藤さんの答えに対してさらに質問することができました。話をしていると、佐藤さんがどれだけ大槌や赤浜のことが好きなのか分かりました。これからどんなことをしていけばいいのか、少しだけど分かった気がします。

取材・撮影／藤社 彩乃、佐々木 朱里

記憶を未来に残す 人々の暮らしと思いの記録を 写真と映像で後世に

昭和35（1960）年がチリ地震津波で、その時にカメラがあればいいなって思ったのね。22か23歳のころだったかな。その翌年にカメラを買ったの。ミノルタが初めて出した一眼レフ。それで病みつきになって、いろんなものを撮り始めたんだ。休みの日は、山に行ったり、泊まりがけで写真を撮ったり。十勝沖地震（2003年）の時の津波を8ミリフィルムで撮ってあったのが、今回の津波で全部流されたの、あれは残念。私は、風景とか行事、災害なんかも、今撮らなきゃ撮れねえんだっていうとこがあって、その様子を特に「残したい」っていうのが、震災前からあるなぁ。

写真や映像ってすごいものでね、百聞は一見にしかずっていうけれど、見れば、あっそうか、ってことになるからね。大槌高校復興研究会の皆さんも、定点観測やってるでしょ。すごいねぇ、あれは大事だ。先輩たちが撮ったものもあるでしょ。津波で何もなくなった所に家が建って町ができていく、それは町の記録だから。記録を保存していくことは、本当に大切だと思う。

私は、昭和32（1957）年から平成27（2015）年まで消防団に入っていたんだけど、地震に始まり地震に終わったって感じだね。平成13（2001）年に山火事があった時、消防団員と防災ヘリに乗って、町の中を撮った写真が、がれきの中から出てきたのよ。他にもいろいろあって、俺が小さいころは、産湯に使ってた愛着のある井戸があってね。その近くにあった箱山幼稚園で、真冬に裸になってね、乾布摩擦するの、毎朝。あれはすごかった。カメラっていうのは、好きで写真を撮るだけじゃなくて、記録性っていう強さを大事にしながら保存していく。まちづくりとして大事なことだよな。

震災後は、風景も変わったし、気持ちも変わっているけど、撮る意欲は変わってない。むしろ、なんでも撮りたいっていうかね。特にね、大槌まつりが特殊なもんで、町民は見にくるんじゃねえんだ、参加するために帰ってくる。そういう大槌の浜や祭りのあの「かまり」（当地の方言で匂い、香りの意）がね、フーッて来るんですよ。なんとも言われねえんだよなぁ。

何年か前に、娘の旦那がドローンを買ったんですよ。家がまだ建っていない辺りの町の様子を撮ったり、釜石のラグビー場とか、浪板の滝に行ったり。町としての復興は、まだだけども、俺の復興は、家を建ててこたつにあたって、お茶っこ一杯飲むの、あぁいいなって。それが私の心の復興だと思ってる。

高校生の感想

藤社 彩乃

話を聞いて写真を撮ることが本当に好きなんだなぁって思いました。写真について質問すると笑顔で楽しそうに答えてくれました。お客さんから「撮ってくれてありがとう」と言われるのがうれしいとおっしゃっていた時の笑顔が本当に素敵で、印象に残りました。

佐々木 朱里

カメラで写真などを撮るのが好きで、山に行ったり、泊まりがけで写真を撮ったりすることや、波や風の音を映像に合わせるのが一番楽しいと言った時の笑顔が印象的でした。

煙山（けむやま） 佳成（かなり）さん

1938（昭和13）年8月、大槌町末広町生まれ。安渡で薬店を営みながら57年間消防団員として活動。若くしてチリ地震津波を経験したことを契機に、安渡の町や人々の暮らしを写真に残す。2018（平成30）年に自身が記録してきた写真と映像約200点を「安渡地域アーカイブ展」で公開。

取材・撮影／瀬戸 翼、野﨑 悠矢

〝つながり〟が最大の財産
出会った縁を大切に、思いを後世につなぐ

大槌の人たちはお祭りになると大変な盛り上がりになるでしょ？そう思わない？　一つのイベントをすることで日常を一瞬忘れられる、その感覚が大槌の人たちに根付いている。いい例が郷土芸能。「ライトアップニッポン」もそういうところから始まった。

花火の原点は、亡くなった方に思いをはせるとか、弔うとか。当時はまだがれきもあって花火師さんにも難しいと言われていたけど、あれだけ大変な思いをして、やることが山積みの大変な時期に警察や消防が協力してくれたからこそ実現できた。花火を見ながら皆さん、涙を流しているんですよ。みんな、震災で家族を亡くしている。財産を失った人もいる。当時は涙が出なかったの。泣ける人はうらやましくさえ思えた。

今をどう生きるか、どうしたらいいかが先で、泣いている場合じゃなかったですよ。

そんな中で、普段は目にすることのないきれいな花火が目の前で上がっているわけ。一瞬だけど、何かきれいなものを取り戻せた瞬間だったんじゃないかな。あのころはまだ灰色の世界だよね。一瞬でも色のある世界が見られた瞬間に、自然とこぼれた涙なんだろうなって、私は今でもそう思っています。そもそもは鎮魂の花火でしたが、生きている人にとっても大きな意味を持っていたんです。

そして、児童や生徒の居場所となる「カタリバ」も力を入れた取り組みの一つです。これは学校が終わってから家に帰るまで気を遣うことなく話したり、勉強したりできる場所。文科省の方に「大槌の子どもたちに今、何が必要ですか」と聞かれて答えたのが「居場所」。学校が復旧しても避難所に帰ると、周りに遠慮しながら、大人の顔色を見ながら過ごす子どもたちがいっぱいいたんです。

そこで東京の「NPO法人カタリバ」が協力してくれることになって、小鎚神社の前にある集会所の上町ふれあいセンターを利用してスタートしました。やる場所とか、建物を建てる土地とか、その資金集めとか、さまざまな支援や協力してくれる人とのつながりで、カタリバが成り立っています。

そこに子どもたちが集まるようになったし、大槌町にとって少しずつ当たり前のような存在になってきた。支援や運営を続けてくださる皆さんに感謝しながら、日常的にちょっとの時間を過ごすだけでも違うと思うんです。復興が進むにつれて寄り添い方は変わるかもしれないけど、カタリバでいろいろな人たちと接することは、子どもたちにとって非常に大きな財産になると信じています。私が町議になったのも、子どもたちのために、自分に何かできることがあるんじゃないかと思ったからなんですよ。

それ以外にも本当にいろいろな方とのつながりを持たせてもらって、震災以来、ずーっと続いている。これが私の一番の財産。何かをするよりも、人と出会ったことを大事にするのが一番いいことなんじゃないかな。それによってその人たちが次の世代に影響を与えて、それがまた後世につながっていくんだろうなって思っています。

東梅（とうばい） 守（まもる）さん

1958（昭和33）年10月、大槌町小鎚生まれ。盛岡市や釜石市の新聞販売店に勤務していたが、震災を機に町議会議員に立候補して当選。震災の年の8月に始まった、打ち上げ花火で被災地を元気づける「LIGHT UP NIPPON」（ライトアップニッポン）、児童・生徒の居場所となる「カタリバ」のプロジェクトに携わるなど、復興に向けた取り組みに尽力している。

高校生の感想

瀬戸 翼

東梅さんが子どもたちのことを第一に考えて行動し、私たちのためにがんばってくださっていると思うと、とてもうれしかったです。

東梅さんの力がなければ、あのきれいな花火を見ることはできなかったと思いました。花火を見ている間だけでも、日常を一瞬忘れてほしいという思いを込めて取り組んだと聞いて、感動しました。

野﨑 悠矢

子どものために何かをやりたい、子どもたちを元気にしたいという思いに感激しました。大槌の子どもたちのために、こんなに熱くなってやってくれる人がいたことに初めて気が付きました。こういう人たちのおかげで私たちはいい環境で暮らしていくことができるのかと、感謝の気持ちが湧きました。

取材／六串 香穂、山﨑 光・撮影／佐々木 慎也

400年以上続く伝統と震災時に大きな力となった緩くて豊かなつながり

郷土芸能っていうのは門外不出でよそ者は入れないのが当たり前でした。でも、30年くらい前かな、それは違うよと、ちょっとずつ外へ開いていったのが結果的に震災後に役立った部分はあると思います。震災の年の7月31日まで臼澤鹿子踊（うすざわしおどり）の伝承館が避難所となり、震災発生直後から数日間は150人以上の人々が避難されたと思います。臼沢地区の人だけじゃなくて、安渡とか須賀町とかの小学生が練習で使ったりすると、そのお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんも来るわけでしょう。それで伝承館は山の方だから津波が来ても大丈夫って多くの人が感覚的に分かっていた。

地震直後に須賀町のおばあちゃんが車で「避難させてくださーい」って来て「この建物に避難していいんだ」ってのはこっちの方が気付かされて。それから車がどんどん来て、初めて「今夜、避難所としてここを開かさねばなんねえな」っていうことに気付きました。周囲の家を回って、ろうそく、米、発電機を持ち寄って、駐車場に止まっていたプロパンのボンベを積んだトラックにガスを提供してもらって。水は何十年も前から習慣的に使っていた沢水をくんで利用しました。

まちづくりでは、「おしゃっち」を建てる時のワークショップとか、いろんなものに参加した。私は震災で家も財産も被害を受けてない。被災して全て持っていかれた人たちに対して反対のことは言えねえっていう葛藤があります。例えば旧役場庁舎は今後生まれてくる人たちのために教訓として残すべきだと思うけど、今「見たくない」っていう人にそのことは言えないんだよね。

郷土芸能は生まれた時からある当たり前のもので、特別なことは考えずにやってきたのが正直なところです。でも、この震災でこれまで漠然と取り組んできた鹿子踊が、なぜ300年、400年伝わってるのかってことを考えさせられました。はやり廃りが早い世の中で、この郷土芸能っつう素朴なのは脈々と続いてる。なんでなんだべなぁって。要らないものは淘汰（とうた）されてどんどんなくなる。それでも郷土芸能がなくならなかったってことは、必要だったってことなんだよね。

なんで必要だったのかは、今でもうまく日本語としては表せないけど、普通に生活して目いっぱい稼いでも明日食うものに困る生活がざらだった過去には、唯一の非日常に没頭できる場であったし、頻度は少ないけど、中身は濃い貴重な時間だった。今回は震災後の避難場所として伝承館が使われたし、関わる人の安否確認の手段としても大きな役割を果たした。世代や性別を超えた緩くて豊かなつながり。これが郷土芸能の持つ一つの力だと思いますし、後世に伝えていきたいです。

東梅（とうばい） 英夫（てるお）さん

1945（昭和20）年10月、大槌町小鎚生まれ。臼沢地区に伝わる郷土芸能「臼澤鹿子踊保存会」の会長を務める。震災発生直後からほぼ半年間、避難所となった伝承館ではリーダー的な役割を果たした。震災後は国内外で鹿子踊の公演をサポートし、現在も伝承活動に努めている。

高校生の感想

六串 香穂

すごく、町のためにも郷土芸能のことを一生懸命考えている方でした。伝統や人とのつながりを大事に考え、震災当時、自ら伝承館を避難所として開き、自ら避難所運営を行い、大勢の被災者をまとめあげた。本当にすごい人だと思いました。

山﨑 光

東梅さんは、伝統だから鹿子踊を習い始めたと言っていたのですが、しっかりと鹿子踊のことや伝承館のこと、人のことをきちんと考えているんだなあと思いました。

私は伝統芸能について知らないことばかりでしたが、インタビューしてみて勉強になりました。

取材・撮影／瀬戸 翼、野﨑 悠矢

普通の人の汗と祈りが込められたこの町こそが本物
林業で次世代に〝恩送り〟

私の生まれは福岡なんです。縁あって吉里吉里の女性と結婚して、42年前に大槌に来ました。そのころは、「旅の人」（沿岸部で他地域から移住してきた人を指す言葉）って言われてたんですよ。ずっと海ばかり見ながら生きてきましたが、あの日大津波が引いた後に周りの山を目にして、震災前と全く同じ姿で残ってくれていることに気が付きました。山は、震災で助かった大事な命なんです。そんな山を生かそうと思い、「NPO法人吉里吉里国」を立ち上げました。昔は暖を取るにも料理をするにもまきが必要だったし、漁師の道具を作るにも木材が必要だった。山は昔から人にとってなくてはならないものだったんです。

私たちがやっている林業は、「恩送り」だと思っています。山は日本の経済成長の歴史の中で荒廃しましたが、昔の人がせっせと汗して植林してくれた木々が今、大きく育っています。先人の汗を、今の私たちは授かっているのです。その恩を、今度は私たちがそのままそっくり次代の人に送ろうとしています。それが活動の柱の大きな一つです。

震災直後、夜暗くなって、いろんな作業でくたくたになって避難所に戻った。さぁ眠ろうと思っても、眠れなかった。こっそり避難所を抜け出して、吉里吉里小学校の校庭の片隅のたき火の前でうずくまることしかなす術がなかった。でもね、炎を見ていると、心が落ち着くのが分かりまして。その時私は、いろんなことに気が付きました。全てのものを失くして、他に失うものがあるのかと。怖がるものはねぇべってことに気が付いた。犠牲になった人たちの悲しみも苦しみも背負って生き続けていこうと思いました。たき火の炎が諭してくれたんです。今でもね、背中にあるものが教えてくれます。「前に突き進むしかねぇべ！」って。

震災から7年がたちましたが、立ち上がれない人もいます。でもね、いろんな理由があるの。だから、立ち上がれない人たちを責めたりすることは、決して許されません。立ち上がることができた私たちが、その人たちの分まで、がんばって働くだけです。それでいいと思っています。

実はね、私は震災のすぐ後に全壊したわが家を見て、「福岡に帰ろう」と思ったんですよ。弱い人間なんです。でもね、女房の「この家にもう一度住みたい」って言葉で我に返ることができました。

あなたのすぐそばにも、冗談を言いながら、お酒ばかり飲みながら生きている人がいるかもしれない。そういう「普通の人たち」、彼らも正直に生きている。そういう人たちだって、本当に何かの力になる人たちなんだ、そういう人たちの「汗」と「願い」と「祈り」が込められてつくられたこの町が、「本物の町」です。また何かこの町にとんでもないことが起こったとしても、そういう人たちが体を張って町を守ろうとすると思います。

そういう人たちと共に、私は生きていこうって決めたんです。私も普通の人の一人として生きていくと思えば、何も怖いことはないのだから。

芳賀（はが） 正彦（まさひこ）さん

1948（昭和23）年1月、福岡県糸島市生まれ。漁師の家に生まれ、結婚を機に大槌町吉里吉里で生活を始める。震災後、「NPO法人吉里吉里国」を立ち上げ、町民と一体となって大槌町の森林資源の活用を推進する活動をしている。

高校生の感想

瀬戸 翼

芳賀さんは、林業は「恩送り」、次の世代へ恩を送ることだとおっしゃっていました。このことを聞き、自分も林業に興味を持ちました。行方不明者の捜索活動でつらい時も、たき火の炎を見ながら、亡くなった人が前に突き進めと言ってるような気がしたというエピソードに感動しました。

野﨑 悠矢

「恩送りの林業」という言葉に感動しました。昔の人が汗水流して植えた木を大切に育てたい、その恩を次の世代に、という考えがとても素晴らしいと思いました。芳賀さんの「残してもらった命」を誰かのために生かしたいという思いにとても感動しました。

取材・撮影／前川 菜緒、櫻井 ことみ

震災の経験を語るのは自分たち町と命を守る救急救命士に必ずなってみせる

自分が活動している「大槌バラエティーショー」は、2016（平成28）年にスタートした、劇や文化活動を通じて大槌町の皆さんを笑顔にしようっていう企画です。3回目の公演では主役の消防士を演じました。

「広報おおつち」に募集があったのがきっかけで中学2年生から始めたんですけど、最初はまあなんとなくやってみっかなーみたいな。友だちとしゃべってて、これ俺行ったらビッグなれんじゃね、有名になれんじゃねって。最高の瞬間は、幕が開いて自分が出たときと、自分のセリフでお客さんが笑ってくれたり、泣いてくれたり、反応してくれるときですね。そのために半年近く練習してきたかいがあるなって思います。

もともとは栄町に住んでいたんですけど、震災の年に引っ越す予定でした。本当にぎりぎりのタイミングで建設工事を始める直前に津波に流されました。周りに住んでた人がどこに行ったかも分かんないですし、誰が生きて誰が亡くなったのかも分からないです。地震の後は城山に逃げたんですけど、津波が来た時、目の前で何人も人が亡くなるのを見ました。棒一本を差し出せば引っ張れたかもしれないけど、小学生だったからできなかったし、沈んでくのを見てるしかなかったです。

こういう大きな震災は結局もう一回起きると思うんです。何年後か分からない。でももう一回起きるんですよ。そのときに自分の経験が何かの役に立てばいいなと。そしてそれを伝えていくのは経験した人の義務だと思います。

震災を通して感じた無念さみたいなのもあって、消防士になるという意志が前より強くなりました。5歳くらいまでは消防車や救急車が怖かったんですけど、救急の日のイベントでそのすごさを知って。それからは暇さえあれば消防署に行くような消防マニアですよね。たくさんの消防士さんに親切にしてもらいました。その中には震災で亡くなった消防士さんもいましたけど、町やみんなを守る姿は本当にかっこよかった。だから自分も資格を取って、救急救命士の資格を持った消防士になりたいなって。救急救命士の資格を持ったレスキュー隊員になって今度は自分がこの町で生きて、守っていきたいです。

やっぱ、大槌は自分の故郷だし、ずっとここで過ごしてきたこともあって、海がないと落ち着かないんです。震災の後も4カ月半ぐらい雫石町に避難していたんですけど、帰りたくてしょうがなかったですね。大槌が自分の生きていく上での最高、最強の環境なんで。友だちもいっぱいいるし、大槌じゃないとこじゃ生きれないですね。DNA的にたぶん、大槌じゃないと無理なんでしょうね。

齊藤（さいとう） 和希（かずき）さん

2001（平成13）年10月、大槌町栄町生まれ。釜石商工高校に通う高校生。16（同28）年にスタートした「大槌バラエティーショー」に当初から参加し、主役を演じるなど精力的に公演を重ねる。将来の夢は救急救命士の資格を持った消防士になること。

高校生の感想

前川 菜緒

和希さんは私と同い年だそうです。それでも、しっかりと将来の夢を持ち、その夢をかなえるために今後どうしていくかといった考えを持っていて、とても驚きました。

櫻井 ことみ

「みんなを元気づけたい」という気持ちを聞いて驚きました。当時の私は、そのようなことを考えることができなかったので、これから大槌に貢献していけるようにがんばりたいと思いました。

取材・撮影／六串 香穂

大槌で学ぶことがどこで学ぶよりも面白い僕は本気でそう思っている

僕は、被災地で生きる目的というか、幸せを見つけに行くと思って、大槌に来た。勉強していい大学に行けば幸せになれる、みたいな価値観をどこかで捨てるっていう思いがあったんだ。震災の時は、東京で働いていて、ビルの29階にいた。父の実家は、陸前高田市にあったけど、よく知らない場所だったんだよね。家に帰ってテレビ付けて、大変なことになっていることを知った。東京にいて、ここに本当の幸せがあるんだろうかって思う生き方をしていてもしょうがないなって思ったんだ。

被災地に子どもたちのための「コラボ・スクール」をつくることになった時、「大槌でそんな塾やったって、誰も来ないよ」って言われたの。でも、80人の申し込みがあったわけ。学びたい子たちがこんなにいるってすごく驚いたし、あんな真っ暗な中に、会場の「上町ふれあいセンター」だけ明かりがついてたでしょ。あの状況下で、町の人にとっては、子どもたちがあんなに学んでいるんだから、がんばらなきゃという気持ちになるんじゃないかと感じた。

今は、「おおつち型教育」というのに取り組んでいる。震災後、人が大槌からいなくなっている現実問題と、その一方で、都会では受けられない大槌ならではの教育、大槌だからできる教育をする。例えば、古里を学ぶとか、ここだけの自然を学ぶとか。大槌だからできなかったことを少しでも減らす。これは、都会のように外国人がいないから外国人と話す機会がないとか、良い塾がないとかじゃなくて、今の学校だけじゃなく、もっと地域の人から協力を得られるシステムをつくって、地域と学校、保護者と子どもたちと行政が一緒になって教育をつくっていこうというプロジェクトなんです。

これまでは震災で大槌町が大変な状況にあった。時間がたって、この町は、本気で変わりたいのか、よくなりたいと思っているのかっていうことを最近、聞きたくなることもある。外の人が大槌に来て仕事をするっていうのは、やっぱり並大抵なことではないことを感じながら、僕はずっと仕事をしてきたんだ。

大槌町を日本一教育がいい場所にしたいって、本気で思ってるんだよ。大槌ならではの、絶対これからの社会に求められる教育ができるって信じている。例えば、旧役場庁舎問題もそうだけど、答えがない問題に取り組むこととかさ。みんなで課題を出し合って、話し合って、みんなで納得できるような答えを見つける力を付けていく。それが大槌には、めっちゃ転がっているんだよ。

高校生の感想

菅野（かんの） 祐太（ゆうた）さん

1987（昭和62）年3月、横浜市生まれ。震災後に10代の人たちを支援する「NPO法人カタリバ」（本部・東京）に所属し、子どもたちが落ち着いて学ぶことができる環境をつくるため「大槌臨学舎」を立ち上げる。現在も大槌町教育委員会の教育専門官として大槌町の教育に携わっている。

六串 香穂

震災当時、東京都内で勤務していて、そこからわざわざ大槌に来て、大槌のために何かしようと活動を始めたのが、自分にはまねできないことかもなと思いました。

「おおつち型教育」というプロジェクトに携わっているそうで、大槌の小中高の教育をちゃんと考えてくれていて、すごくありがたいし、うれしかったです。菅野さんと久しぶりに会えてしゃべれて、すごくうれしかったし、楽しかったです。

取材・撮影／山﨑 大陽

自分たちの町は自分たちの手で全世代が集うまちづくりを

吉里吉里では、毎年10月の第1日曜が「吉里吉里大運動会」の日。みんなで楽しくわいわい集うコミュニティーの場だよ、と。小さい子からじいちゃん、ばあちゃんまで、昔は500人も600人も来てね。震災から3年がたった平成26（2014）年、他の地区に先駆けて「もう運動会やろう！」と。「もうちょっと後にした方がいいんじゃないか」とか、「仮設住宅にいる人たちが、そんな気持ちになれないんじゃないか」とかいう意見があったかもしれない。でも、やろうって決断したらばね、350人も来ていただいて。私も泣きながらあいさつした。今でも忘れられない。

でもね、各地域の町内会長さんががんばった。そこには震災前からの活動に対する住民からの信頼があったから。やっぱりリーダーは、何か事を起こそうとしたとき、突っ走ることも必要かなと思いますね。そして継続していくこと。この継続はね、大変なんですよ。でもリーダーたちも事務局も楽しんでやる。みんなで楽しむことが地域の住民に伝わると思います。

公民館運営委員会というのがあって、今は30団体の代表者で成っています。保育園の園長先生や保護者会、おまわりさん、長寿クラブの会長さん、小中学校の校長先生にPTA会長さん、震災後にできた「はまぎく若だんな会」や「NPO法人吉里吉里国」、民生委員の代表者、町内会長さん……。みんなで考えながら、まちづくりをやってきました。大事なことは、全て公民館の運営の中で決めてるんです。早朝の草刈りや防犯灯の管理などの環境整備も、役場を頼りにしない。よく、吉里吉里は特別だ、独立した「吉里吉里国」だって言われるけど、いや、普通ですよ。自分たちの町は、自分たちで住みよくする。それが、まちづくりだと思うの。

地域コミュニティーを作るには、昔も今も、やっぱり公民館は大切な場所であると実感しています。新しい公民館は、地域のためならばってことで、住民に協力していただいて、町のど真ん中に設置した。どういう設計にするかも、みんなで考えた。それが大当たりだよ。思い描いた通りになって、みんな喜んでましたよ。地域のみんなでつくった。そこがいいのよ。夏休みには小中学生が毎日、来る。じいちゃん、ばあちゃんも来て、自由にお茶っこ飲んで。震災前に盛んに行われていた三世代が交流できるような事業は、これからも必要かなと思っています。公民館を使ってにぎやかにね。

でもね、吉里吉里だけが良くなっても駄目だと思うのね。大槌町全体で、自分の町は自分たちで助け合いながらどうにかしていくんだと、特に若い人たちが本気になって考えるような仕組みづくりが必要。これからは、じいちゃんの時代じゃねぇ。どうしたら町は、みんなが楽しく集える場になるか。日々、考えるのも楽しいよ。その行動は、嘘つかない。絶対に花咲くから、いつかね。

芳賀（はが） 博典（ひろのり）さん

1951年（昭和26）年6月、大槌町吉里吉里生まれ。2013（平成25）年から大槌町中央公民館吉里吉里分館の館長を勤める。「吉里吉里大運動会」の第50回と東京五輪が重なる2020年に、地域で「ミニオリンピック」の開催を構想中。

高校生の感想

山﨑 大陽

とても吉里吉里のことを思っている方で、吉里吉里について一つ一つ丁寧に教えてくださいました。博典さんが一生懸命考えてくださっていることが話している間に分かり、自分もこのように、地域のために一生懸命何かをできる人になりたいと思いました。

取材・撮影／野﨑 悠矢、瀬戸 翼

みんなに元気と笑顔を
人と人、人と地域をつないだ
ラジオパーソナリティー

2012（平成24）年3月に開局した「おおつちさいがいFM」で約4年間、パーソナリティーをしていました。開局の第一声を任せられました。

まずは声を出して、みんなが元気になってくれればいいなっていうことで始めたのね。例えば方言とか、大槌の文化歴史とかを大切にね。とにかく、みんな情報欲しかったですよね。それで、情報をなんとか伝えようって。

家族を亡くして仮設で独りぼっちって人も多かった。その人たちに、一瞬でもいいから笑いが生まれればいいなと思っていました。残念ながら、奥の方にある仮設には電波が届かなかったんだけど、車の中でラジオを聞いてくれる人もいました。「あの人出でだったよ」と、ラジオが隣近所との会話のきっかけになることもありますしね。

開局から1年くらいたって、そろそろ震災のことを話してもいいんじゃないかと思って、町民の方に被災時の様子を聞く「金﨑伊保子としゃべって×2」という番組を作りました。「他の人よりも、私が一番つらい目に遭ったんだ」って、そのことだけ言って心を開いてくれなかった方もいました。でもそこを、いくらかでも、少しずつ、「みんな同じ思いをしてるんだよ」っていう感じで解きほぐして、傾聴みたいな形にもなったかな。

16（同28）年に閉局が決まった時は、「これからなのにな」って思いました。仮設から町の方に移り住んでラジオを聞けるようになった人もいたし、新しくできた災害公営住宅に入った人も多かった。さあ、これから新しい生活が始まるってときに、ラジオから地元の情報が流れていたらいいだろうな、心細い気持ちを励ますような音楽が流れていたらいいだろうなって。

情報はインターネットなどでも知ることはできますが、高齢者は見られない人が多いからね。誰かがラジオを聞いて、それが口伝えで広まる。そういうのがあればいいな、寂しい思いをしなくて済むなって思うんですけどね。

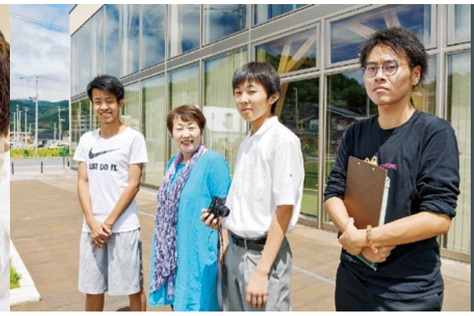
今の時代は、隣に住んでいる人も分からない、なるべくなら触れないで過ごしていきたいっていうのもあるけれども、昔ながらの「おせっかいおばあさん」がいるとか、そういうのも必要ではないかな。

これから大災害が起きたとき、「あ、あそこの人、逃げたべかな」と思うでしょ。だから、地域のことを知っているとか、地域の人たちと情報を共有して歩んでいっていれば、いろんなことが分かるんです。そういう「地域の力」がこれから大きな力になるんじゃないかな！

金﨑（かねざき） 伊保子（いほこ）さん

1951（昭和26）年11月、大槌町安渡生まれ。震災以前は平凡な主婦だったが、2012（平成24）年に「おおつちさいがいFMのラジオパーソナリティー」に抜てきされ、4年間明るい声を届け続けた。今もラジオネームの「マダム伊保子」と呼ばれ、多くの町民に親しまれている。

高校生の感想



野﨑 悠矢

自分も被災しているのに、みんなを元気にしたいという考えを持ってラジオをしていたのが、とてもすごいと思いました。伊保子さんのラジオを聞いて明るくなった人は多いだろうなと思いました。「マダム伊保子」、この愛称がとても似合う、とても明るくいい方だと感じました。

瀬戸 翼

伊保子さんから聞いて思ったことは、コミュニティーの大切さです。伊保子さんの笑顔や音楽などが多くの人を元気付けていたと思うと、本当に意味のあるラジオだなぁと思いました。これからは、町民から意見を出すことが大切になると思うというお話を聞き、自分でもできるだけ、地域を大切にしていこうと思いました。

取材／中村 海鈴、八幡 有香・撮影／佐々木 慎也

多様性を育みたい 多くの人と触れあう中でこそ 人は成長できる

最初に大槌に来たのが、2011（平成23）年4月、国際NGO経由で派遣されました。初めての大槌の印象で忘れられないのが、まだ上下水道が全然使えないころに、食堂「さんずろや」さんの店の中に入れてもらった時のこと。そこから見た景色が、めっちゃきれいだった！ 海や半島の緑が太陽の光を受けてキラキラ輝いて。それ見て腑に落ちたのね。大槌が良いのって、大槌の人がこの町に残りたいって思うこの景色や感覚がDNAレベルであるからなんだなって。

「おらが」がやっているのは、企業研修とか修学旅行などを受け入れる復興ツーリズム事業。大槌に来る人は、そこから何かを学びたい気持ちの人が多いね。最初は震災語り部も人の不幸で食ってんのかみたいな声も聞かれた。今もきちんと意識して活動している。

私たちの活動は、この町の人と、「一緒に育つ」ことを目的にやってます。かっこよく言うと、町民の人材育成です。復興計画が多少遅れても道路とか家はできる。でもきれいになった町に住む人も、変わっていかないと意味ないと思う。

震災後の町に集う人たちに食事を提供した「復興食堂」の2年間の活動でいっぱい人が来てくれて、私たちスタッフも成長したっていう意識があったの。私も海外でいろんな生き方とか価値観に触れたことで成長できた。外の意見や考え方が入らないまま、町が回っていく時代ではないし。触れ合いを通じて、今までなかった考えや価値観に気づき、町の人同士成長していく。人を呼び込む手段として、私たちはツーリズム事業の活動をしている。

安渡出身の旦那と結婚して、子どもが生まれて……。旦那のお父さんは、震災の犠牲になったんだけど、家は何代も大槌に住んできたのね。私は全然知らない人だけど、スーパー「みずかみ」とかショッピングセンターの「マスト」に行くと、旧知の知り合いかのように話し掛けられるの。お義父（とう）さん知ってましたよとか、お義母（かあ）さんと昔、近所だったとか。あったかいなぁって。周りの人が子どもの誕生を心から喜んでくれるのは、旦那であり、旦那のお父さんお母さんが、ここで毎日1個ずつ小さく小さく積み重ねてきてくれた人間関係の表れだなぁと感じる。ありがたいです。

長く同じ場所に住んでいると、そこにある価値観に縛られて、マルかバツかの二択になってしまう。今の旧役場庁舎の存廃議論とか。二択の間には、いろんな意見があるんだよっていう意識を若い人たちに持ってほしい。「おらが」を続けるからには、これからを担う若い子がやりたいことを拾い上げられるプラットフォームでありたい。成功するか失敗するかは別として、取りあえずやってみようと。若い世代の多様な意識を育てていって、大槌町をどんどん面白くさせていきたい。

一般社団法人 おらが大槌夢広場
神谷（かみたに） 未生（みお）さん

1975（昭和50）年8月、名古屋市生まれ。アメリカや東南アジアで看護師として活動していたが、震災がきっかけとなり2011（平成23）年に大槌町で復興支援に携わる。12年から語り部ガイドなどの復興ツーリズム事業を行う「一般社団法人おらが大槌夢広場」に所属し、現在は代表理事兼事務局長を務める。

高校生の感想

中村 海鈴

大槌にいる私たちがもっと成長しなければならない、そう感じました。自分が知らない大槌について学ぶこともできたので、とてもうれしかったです。

八幡 有香

神谷さんは「自分の大切な人を大切にできない人は、いろいろなことを大切にできない」というお話もしてくれました。周りの人を大切にしてきたことも聞いたので、とても印象的でした。良いお話をたくさん聞くことができました。

取材／六串 香穂、山﨑 光・撮影／佐々木 慎也

ここに来れば、みんなに会える 手づくりから広がった つながりを大切に

私たちは「おおつちおばちゃんくらぶ」。震災後にできたおばちゃんたちの集まりです。みんな大槌にいだったんだけど、震災前は全然会ったことも話したこともない人たちなんです。震災後に縫うことや編むことをきっかけに自然に集まりました。今はひょうたん島やサケのストラップを作ったり、ふきんを縫ったりしています。

参加してるおばちゃんたちってね、毎日来てくれるの。みんな皆勤賞だね。津波の後、近所の人たちがみんなバラバラになったでしょ。だから知ってる人たちがそばにいなくて、話し相手がいない。だから、ここさ来ると、いっぱいいろんな人たちがいるから、誰かに会える。震災後、初めて会えた時には涙流してね。「元気だった」「よかったねぇ」とかって。今ではみんなで「ああでもねえ、こうでもねえ」って言いながらやってますけど。

3.11の「Shake Hand（シェーク ハンド）」っていうのをやってるんですけど、面白いよ。魚のシャケと英語の「握手」を掛けてる。おばちゃんたちがサケの形の白いヌードザケを縫って作って、それを全国のみんなにデコレーションしてもらうんですよ。「デコ鮭」って呼んでるんだけどね。サケは必ず4年後に帰ってくるでしょ、吉里に。だから吉里に帰ろうってことで、みんなにサケにデコしてもらって、そして大槌に送ってもらうの。芸能人の方も作ってくれたりしてるんだよ。羊毛を使ったり、絵を描いてみたりして……。もうびっくりしちゃうくらい素敵なサケたちが集ってます。

あとは教室を開いて、地域の人たちと手芸教室をしたりしています。まぁ、他の団体さんみたいに直接町の役には立ってないかもしれないけどね、みんなで楽しくやってますよ。

私たちは、恩返しできたらいいなって思ってて。震災後にボランティアに来てくれた人たちとのつながりが今もあるんです。それで私たちはその人たちのことをね、すんごく大切に思ってるの。だからその人たちに「ありがとうございました」っていう気持ちを表したくてね。注文されたものを作ったり、イベントで販売したりしています。手づくりを通して、大槌の人とも他の遠い土地の人とも、いろんな人とつながっていることがね、うれしいの。

大槌で暮らすことの良さ？　なんだろうな、どこがいいんだか、嫌なことは出てくる。だけど、大槌のこと悪く言われると反発したくなる。おかしいもんだよね！

おおつちおばちゃんくらぶ

川原畑（かわらはた） 洋子（ようこ）さん

1955（昭和30）年8月、大槌町栄町生まれ。震災後に結成された町民団体「おおつちおばちゃんくらぶ」の「みんなのお世話役」として親しまれている。手芸活動を通して町民交流の場をつくり、イベントを開催するなどして町外の人々とのコミュニーケーションも図っている。

高校生の感想

六串 香穂

川原畑さんは、自分たちの活動は町のために役に立っていないと言っていたが、私はそうは思わなかった。町を盛り上げているし、大槌の仮設の孤独死を阻止してくれていると思うし、おばちゃんたちが作る手芸品もすごくかわいくて、自分もやってみたいと思った。

山﨑 光

おおつちおばちゃんくらぶの方々は、震災前は全く知らない人同士で話したことがないのに、仲良くなってみんなで手芸をしていることがとてもすごいことだと思いました。とても緊張したけど、おおつちおばちゃんくらぶの方々はとても優しく話してくれて、インタビューしやすかったです。

取材／藤社 彩乃・撮影／佐々木 慎也

人が行き交い、笑いがあふれる夏祭りの復活が僕たちの本当の復興の一歩

赤﨑さん　「よ市」は、昭和50年代から行っている、出店が立ち並ぶ末広町商店街の夏祭りです。震災の3カ月ぐらい後から商店街の仲間で集まって、震災の後どうしたらいいのかっていうのを、1カ月に1回ぐらい話し合いをしてたんですよ。そうしたら、やっぱり戻ってこようっていう人たちが多かったんですね。震災後は、町内のさまざまな場所の仮設店舗に入ったりして、バラバラになってしまったんです。区画整理事業が終わって、元の所に帰れるようになったんですけど、もちろん全員が帰れたわけじゃない。商売をやめた方もいらっしゃるし、前の所でできないので、まだ場所が決まってない人もいるんです。

今はまだ、5、6軒ですけど、戻ってこれる人は戻ってきたんですね。そして、やっぱりよ市っていうのが震災前も夏の一大行事だったし、町民の方々にも楽しみにしてもらってたんですよ。だからどういう形であれ、夏祭りを復活させるっていうのが僕たちの本当の復興の一歩じゃないかって思いがみんな強かったんで、2017（平成29）年に第1回を行いました。たくさんの人が来てくれましたね。とにかく僕たちにとっては、復興のシンボリックなことと思い、みんなで協力して、復活させようっていうことで、がんばってやってますね。

自分でもバンドをしているんですけど、大槌の人は踊りにしろ、お祭りにしろ、音の出るものが好きなんだよね。童謡、歌会、コーラス、民謡とかサークルもいっぱいあるんです。結構、音好きな人が多い町かなぁと思います。音楽は人が集まるっていう一つのツールであることは間違いないですね。

内金﨑さん　僕も「ウタカラユニット」っていうバンドを組んでまして。地域の宝を、歌の力で元気にしようと活動していますね。やっぱ音楽はいいっすよね。

これからの大槌について思うことですけど、みんな笑っていればいいかなと。そんな町にいて、そのお手伝いをできるのが、この商店の皆さんや僕の活動なのかな。にぎわいをつくっていけるというか。店のロゴはうちの双子の子どもの笑顔っていう意味もあるんですけど、大槌じゅうに広がればいいなと思います。

赤﨑さん　僕は、気軽に人が行き交って、買い物に来たり、休みに来たり、まずはそういう町に戻ってほしい。商店街から遠くて来られない人には、今まで二度ぐらいやってますけど、出張の商店街を開く活動も続けていきたいです。そういう手助けをしながら、町の人と一緒にやっていきたいなと思っています。

末広町商店街

内金﨑（うちかねざき） 大祐（だいすけ）さん（左）・赤﨑（あかさき） 潤（じゅん）さん（右）

赤﨑 潤さん　1964（昭和39）年5月、大槌町末広町生まれ。釜石南高校（現・釜石高校）卒業後、仙台の大学に進学。その後、地元に戻り家業である米穀店を継ぐ。現在は喫茶店「夢宇民」のオーナー。末広町商店街の活性化に努め、よ市復活の中心となった。ロックバンド「ムーミンズ」でギターとボーカルを担当。

内金﨑 大祐さん　1974（昭和49）年1月、大槌町大町生まれ。代々続く地元の自転車店だったが、震災後は自転車店にカフェを併設させた「Chari Café」として再オープンさせた。趣味は赤﨑さんと同じくバンド活動。「ギターの弾ける自転車屋さん」として町の盛り上げに大きな役割を果たす。

高校生の感想

藤社 彩乃

よ市を復活するために、いろいろ苦労されていたのが分かりました。よ市を復活させることは復興への第一歩だと言っていました。なので、私にも協力できることがあればもっとやってみたいと思いました。

赤﨑さんと内金﨑さんの話を聞いて、大槌町のことで初めて知ったことがあったので、もっと町について知ってみたいと思いました。

取材・撮影／佐々木 慎也、菅野 雅也、佐々木 加奈

心のつぼみが花開く日を夢みて この町で有意義に暮らす選択肢をみんなに

大久保さん　私たちが子育て支援事業を始めたのは、震災後にうちの長女が生まれたころから「大槌町にお母さんたちの居場所がない」っていうのをものすごく感じるようになったからです。不便というか、子どもを遊ばせられる場所がなかったりするから、「子育て世代の居場所をつくりたい」って。震災前はご近所付き合いがあったから、そこまで問題視されてなかったと思うんですけどね。それで、コミュニティーカフェの運営を始め、子育て世代を対象とするサロンや講座をやっています。今の大槌の課題は、働く選択肢が本当に少ないことだと思っています。

菅谷さん　そうそう、大久保が「選択肢」っていう言葉を結構使うんですけど、本当にそれを大事にしたいなっていうのは思っていて。私自身、正直、大槌で結婚して出産っていうのにポジティブなイメージってあまりなかったんです。どのお母さんを見ても大変そうで。田舎町で、しかも被災地だから、子どもを育てるための環境が整ってないのかなって。でも、職業や趣味などの選択肢を増やしていくことで、子育てをしていても住みやすさを感じられるようになってきたかなって思います。

大久保さん　子どもに合わせた働き方や、自分がやりたい職種がなかなかマッチしないのが現実。なので、私たちが商品開発をすることで、「Tsubomi（つぼみ）」として、その「働く選択肢」を広げたいって思ってます。だからハンドメードで個人が作っているものを、「フラワーキャンバス」で販売したりしています。

大久保さん　特に思い出に残ってるのは、「子育てフェス」っていうイベントを初めてやった時のことですね。最初は「人来るのかな」って不安で前日、眠れないぐらいでした。「これでちょっとしか来なかったらどうする？」って話したり。そしたら、1回目なのに400人近く来てくれたんだよね！ その時に、それぐらい子育て世代にとってフェス的な楽しいイベントって少ないんだなとも思った。みんな、そういうコンテンツを欲してるのかなって。

菅谷さん　こういう小さい町で400人も集まってくれたうれしさと同時に、課題も見つけたというか。

大久保さん　そうだね、やっぱりまだまだやることがある。本来の大きい目的は、子育て世代が「その日」を楽しめるコンテンツ、しかも子どもも親も家族みんなで楽しめるっていうところ。もう一つの目的は子育て支援をやっている団体さんたちと連携を深めることです。できれば日常的にお互いに情報共有をして、何かやるってなったら一緒にやりたいなって思います。

菅谷さん　私も高校を卒業して、こんな田舎じゃ何もできない、もう大槌なんか出てやるみたいな気持ちで仙台の大学に行った（笑）。でもね、戻ってきた今は、すっごい大槌大好きなんです。

高校生　大槌にこんなおしゃれな空間があるのってすごいなって思って。いとこの赤ちゃんを連れてきたいです。

大久保さん・菅谷さん　連れてきて！ 高校生に来てほしいよね！

一般社団法人 Tsubomi（つぼみ）

菅谷（すがや） 安美（あみ）さん（左）・大久保（おおくぼ） 彩乃（あやの）さん（右）

子育て中の女性が自分らしく輝く社会をつくることを掲げ、2016（平成28）年に設立。
地域コミュニティーカフェ「Flower Canvas」（フラワーキャンバス）や親子向けイベントの運営など、子育ての観点から地域の課題解決に向き合える場を提供している。
団体名称は「心に芽吹かせている思いのつぼみが花を咲かせられるように」が由来。
大久保彩乃さん（代表理事）　1990（平成2）年8月、大槌町大町生まれ。
菅谷安美さん（代表）　1990年3月、大槌町新町生まれ。

高校生の感想

佐々木 慎也

大槌に何か引かれるものがあるから、いったん外に出ても大槌に戻ってきたのだと感じ、感動しました。

菅野 雅也

大槌高校のOGの人が現在どのような活動をされているか知ることができました。お二人は、自分がしたいことを見つけ、壁を感じずに活動をしていて、とてもすごいと思いました。

佐々木 加奈

私の知らないところで大槌のために活動してくれる人がいることはすごいことだと思いました。私もそのような人たちのように自分からアクションできる人間になりたいと思いました。

この町を心に

さまざまな分野で活躍する
〝大槌人〟を訪ね、聞いた
古里への熱い思い。
遠く離れているからこそ、
生まれ育った町を慕う気持ちが強くなっていく。

2019年3月23日に開業した新しい大槌駅。町のシンボルである蓬莱島をモチーフにした大屋根が特徴となっている

若者たちの町民インタビュー

指導者はこう思う

「対話」が震災伝承に

東北大文学部社会学研究室　教授
小松（こまつ）丈晃（たけあき）さん
坂口（さかぐち）奈央（なお）さん

本章「この町と、人と」で、大槌高校復興研究会の生徒たちが聞き手とカメラマンを務め、東北大文学部社会学研究室の学生・大学院生がサポートしたインタビュー企画「この町で生きていく」。2018（平成30）年の夏、会場の町文化交流センター「おしゃっち」で町民と真摯な対話を重ねた若者たちの姿に、指導者は何を思ったのか。大槌高校復興研究会顧問の松橋郁子実習教諭、東北大学社会学研究室の小松丈晃教授と坂口奈央さんに感想を寄せてもらった。

目輝かせた生徒たち

大槌高校　実習教諭
松橋（まつはし）郁子（いくこ）さん

夏休みの8月6日から3日間、大槌高校復興研究会のメンバーたちが被災直後や復興関連の事柄について町内の方々から聞き取りをさせていただきました。今回このような企画で生徒たちを募集したところ、自主的に15人の生徒が参加しました。取材を楽しみにしていた彼らは、「震災について詳しく知りたい」という思いが強い生徒たちです。実際に取材を終えた彼らは、東日本大震災の事をあらためて学ぶ機会となったようです。

「なぜ、あの時、あの場所で避難の呼び掛けがあったのか、やっと理解できた」とか、「つらい経験の中で大人たちは何を思っていたのか、話してもらえてよかった。すごい人だった」等々。目を輝かせて私に報告してくれました。被災時の年齢が幼い高校生にとって、東日本大震災の記憶は薄いと思います。だからこそ、経験したわれわれ大人たちが伝え続けることが大切だと再認識した3日間でした。生徒たちに貴重な体験をさせていただき、ありがとうございます。企画してくださった方々に感謝申し上げます。

震災記録誌のこの章は、大槌高校の生徒の皆さん・東北大学の学生と、今の大槌に生きる住民の方々との「対話」に基づいている。10代半ばの大槌高校生、そして国道45号でつながった仙台の大学生・大学院生たち（大槌町と関わりのある大学生も参加）は、大槌町の住民に問い掛け、お一人お一人が紡ぎ出す貴重な語りに耳を傾け、そして丁寧に記録していった。

この8年間の復興の過程への時には批判的な見解や過去の振り返りだけでなく、今後数年先、あるいはそれ以上先の未来をも見据えた展望や課題についても、率直に語られている。そして、過去を振り返るのはつらいけれども、これから自分たちで何ができるのか、この先の大槌町をどうするのか――これからを担っていくであろう若い世代へのこうした問い掛けとメッセージも込められているだろう。

この震災記録誌はもちろん、震災の経験を検証し、語り伝え、未来への糧にするためのものだが、しかしこのように考えると、この記録誌を作成するために高校生たちの行った3日間にわたるインタビューそのものもまた、一つの「伝承」の場であり、また逆に、高校生の皆さんから問い掛けられた住民の方々も、若い世代の思いや期待を感じ取り、その期待に応えていきたいとの思いを新たにする大切な機会だったのではないだろうか。

その意味では、このような「対話」は、本記録誌を作成するためだけのものにとどまらず、これからも、形を変えながら、大槌町のここかしこで継続されていくべき活動なのかもしれない。長時間にわたるインタビューにご協力くださった住民の皆さん、そして大槌高校の生徒の皆さんに、この場を借りて、あらためて御礼申し上げたい。

震災の苦境の中、
背中を押してくれた両親
「好きなことやれ」の言葉を胸に、
野球を続けた

地震が起きた瞬間は、おばあちゃんと父と自宅にいました。今まで経験したことのないすごい揺れで、これはただごとじゃないなと。急いで弟を保育園に迎えに行って、そのまま家族みんなで裏山に避難して、そこから津波が来るのを見ていました。自分の家は飲食店をやっていたのですが、第1波でお店が流されて、第2波では家が流されました。

吉里吉里小学校に避難していたのですが、避難所での生活は、自分の場合は1週間くらいでした。かなり人が多く、狭かったため、僕と父は津波被害を受けなかったおばあちゃんの家に移りました。1週間とはいえ、避難所での生活は強く印象に残っています。近くのコンビニから流れてきた商品があって、その中から汚れていない食料を見つけ出して、みんなで分けて食べたこともありました。そういう食べ物でもうれしくて、本当においしかったなと思い出します。夜はなかなか眠れず、長く感じられました。

自分は野球が大好きでした。できれば強い学校に進んで野球をやりたいと思っていましたが、正直無理だろうなと思っていました。町はめちゃくちゃになってしまったし、両親もしんどそうだったので。進学についていろいろ悩んでいたところに、両親から「お金のことは気にしなくていいから、好きなことをやれ、行きたいところに行け」と背中を押してもらって、盛岡大学附属高校に進むことを決めました。競争は激しいし、慣れない寮生活も苦労しましたが、両親の言葉を思い出してがんばることができました。そして、夢だった甲子園のグラウンドに立つことができました。

高校を卒業した後も野球を続けました。県内の大学進学も考えていたのですが、大正大学の監督さんに熱心に誘っていただいたこともあり、大正大学に進学することを決意しました。盛岡大学附属高校と大正大学、これらの学校で、多くの人に出会い、貴重な経験を積むことができました。経済的に厳しいにも関わらず、進学させてくれた両親には本当に感謝しています。

地元は、帰るたびに復興が進んでいて変わってきていると感じます。折れずにがんばっている地元の方々には、逆に力をもらっています。大槌町の人の温かさ、きれいな海、食べ物のおいしさなど、県外に出たおかげで気付いたことや魅力を感じることがたくさんあります。

今後は、岩手で高校教師をしながら、野球の監督をしたい。岩手県の野球部を強くして、能力のある選手が岩手に残れる環境をつくっていきたいと思っています。

前川（まえかわ） 剛大（たけひろ）さん

1996（平成8）年5月、大槌町吉里吉里生まれ。小学1年生の時に吉里吉里スポーツ少年団で野球を始める。中学3年生の時、捕手で県選抜入り。盛岡大学附属高校では主将としてチームを引っ張った。大正大学を卒業し、2019（同31）年4月から、同高校の国語教師として新たなスタートを切った。

ラグビーで古里を盛り上げたい
自然豊かで絆の深い吉里吉里が好き

ラグビーを始めたのは小学校1年生の時。父がラグビースクールのコーチをやっていたのがきっかけです。小学校のころは周りが男の子ばかりだったんですが、中学の時に「全日本に選ばれた女の子が青森にいる」って聞いて、「女の子は私だけじゃなかったんだ！」って、世界が広がったんです。一時期、ラグビーを離れたこともありましたが、中学3年生には練習を再開しました。釜石高校入学後も続けていて、東北ユースに選ばれたり、ラグビーの聖地・花園で行われる女子のエキシビションマッチに出場させてもらったりと、たくさんの経験をさせていただきました。

高校の卒業式が終わった春休み、東日本大震災がありました。吉里吉里にあった自宅は1階部分が流されてしまいましたが、家族は無事でした。一人暮らしをしていたおばあちゃんと避難所で会えた時は、とても安心したのを覚えています。

それから避難所で過ごしていましたが、ラグビーでもっと強くなりたくて進学を決めた大学の入学式が迫っていました。やっと電波がつながった時、大学に連絡したら「入学式を予定通り行う」と聞いて。新生活のために買っていたスーツや布団も津波で流されてしまったので一式買い直して、3月中に父の車で大槌を出ました。

当時の状況で家族と離れることは不安だったし、足が悪いおばあちゃんを守らなきゃと思っていました。でも、両親が「こっちは大丈夫だから」と言ってくれたんです。高校生の時に試合で悔しい経験をしたので「もっと強くなって、代表に選ばれたい」という思いでこれまでがんばってきました。だから、いい結果を出して応援してくれる人たちの思いに応えようという気持ちで大槌を出ました。

いつか大槌に戻って子どもたちにラグビーを教えたいという思いは、ずっと持っています。関東に来て、レベルの高さに驚いたんですよ。だから、もっと東北もラグビーで盛り上げたいです。それに私は生まれ育った吉里吉里が大好きなんです。自然も豊かで、「吉里吉里は独立国」って言われるぐらい、絆が深いんです。地域の人たちとの交流がたくさんあって、お祭りや運動会も楽しくやっていました。みんな〝吉里吉里愛〟が強いんですよ。将来、家族ができたら、吉里吉里で暮らしたいなって思っています。津波によって当たり前だと思って見ていた昔の景色がなくなったのは寂しいけれど、大槌全体がもっとにぎわう町になったらいいなと思います。

平野（ひらの） 恵里子（えりこ）さん

1992（平成4）年4月、大槌町吉里吉里生まれ。父の影響で小学生の時からラグビーに打ち込む。釜石高校卒業後、日本体育大学へ入学。卒業後はYOKOHAMA TKM所属選手となり、女子ラグビーワールドカップ2017の15人制女子日本代表に選ばれた。

音楽にも地産地消があっていいじゃないか
自分ができることで
吉里を元気に！

震災当時、東京で音楽活動をしていました。テレビでは甚大な被害を伝えている。でも、親や親戚と連絡が取れない。連絡を待っていられず、物資を車に積み、妻と兄と共に、大槌町吉里吉里に戻ってきました。到着したのは3月13日の夜。両親は無事でしたが、親戚6人が犠牲となりました。

全壊した実家周辺のがれきを片付けていた時、弦が1本切れたギターを見つけました。そのギターを弾いて作ったのが、「三陸に仕事を！プロジェクト浜のミサンガ『環』」のCM曲に起用された「歩きましょう」でした。

震災直後から音楽や表現活動を通して町を元気にしたいという思いはあったのです。それに、がれき撤去などに忙殺され、亡くなった家族や友人に線香を手向けることができない方もいてね。そこで、4月に「吉里吉里元気プロジェクト」を立ち上げ、物的支援も含めた応援活動を始めました。最初の活動が4月29日に吉里吉里の吉祥寺で催された合同葬儀。東京の店舗やミュージシャン、多くの人の協力で4545本の花を届けました。その後にミュージシャン仲間と避難所で演奏したのですが、吉里吉里にあるササキデンキが津波から難を逃れた音響機材を持ち出して協力してくれてね。その後は、8月14・15日の灯籠流しと鎮魂・御霊まつり、一周忌海岸供養での献花などにも携わりました。

その活動中にみんなが集まり町の未来について語れる場所が必要と思い、開店したのが「Cafe（カフェ）&Bar Ape（バー アペ）」でした（現在は閉店）。Apeとは、アイヌ語で「火」という意味。夜の明かりが消えた町の中で目印になればと。がれきを集めて店を造り、そこで母が地元の料理を作って出しました。

今はもう一度、音楽に立ち戻ろうかと。料理に地産地消があるなら音楽にもあっていいじゃないかと考え、大槌弁を駆使した曲を作ったのです。それが、2018（平成30）年11月にリリースした「ナンダ★モンセ」。大槌弁って、どことなくスペイン語っぽいじゃないですか。これに中南米の曲を乗せたら、いい感じで（笑）。地産地消なので、レコーディングは大槌町内で行いました。やりたいことがたくさんあって。シーカヤックのガイドもしているのですが、町の自然を生かしてできることはないかと考えています。もちろん、音楽で大槌と全国をつないでいくことも ね。

ノリシゲさん

1976（昭和51）年7月、大槌町吉里吉里生まれ。ミュージシャン、吉里吉里元気プロジェクト代表。1998（平成10）年上京し、バンドやソロ活動を行う。震災直後、音楽や表現活動を通じた復興応援プロジェクトを立ち上げる。「歩きましょう」がCM曲に起用され、全国的に注目されるなど、音楽を通して大槌町の情報発信を続けている。

Episode file

～記録誌制作～

今を生きる町民インタビュー
東北大生が高校生に協力

東北大学社会学研究室のメンバー。
右から田中さん、木山さん、平澤さん、照井さん、曹さん、小松丈晃教授（仙台市の東北大構内で）

本章のインタビュー企画「この町で生きていく」では、東北大学文学部社会学研究室の大学生と大学院生ら5人が全面的に大槌高校復興研究会の生徒たちをサポートした。学生らの活動は、「社会調査実習」の授業の一環であり、主に研究テーマ「伝統芸能に対する町民の意識の高さや行動が復興まちづくりにどう影響しているのか」について同時に聞き取った。独自の勉強会などで問題意識を培ってきた学生たちは、延べ7日間の現地調査を終えてどう感じたのか、コメントしてもらった。

曹智涵さん　私は偏見を持って大槌に入った。2年間で復興ができた四川大地震を経験した私にとって、大槌の復興は長かった。この町、大丈夫かなと勝手な心配を抱えて来た。しかし、「曹さん、ここに住まないか」と誘ってくれた芳賀正彦さん、照れながらも自分の意見を率直に町議の東梅さんに述べていた野崎君、真面目にインタビューしていた六串ちゃん、あと、熱く伝統芸能を語っていた瀬戸君たちの姿を見ていくうちに、私は、とんでもないばかだと、素直に思った。

照井晴香さん　大槌の海は、祖父母が吉里吉里に住んでいた私にとって、子どもの頃には潮干狩りや船に乗せてもらったといった楽しい思い出ばかりある場所です。しかし、それも大槌の自然を生かし、ずっと守ってきた町民の方々がおられたからだと、この機会に大槌を愛する町民の方からお話を聞くまで、私は気付いていませんでした。震災前と変わらぬ豊かな自然、なにより変わらぬ元気な町民の方々とお会いできて、勝手にうれしく思っております。

平澤葵さん　大槌町民の温かい人情や、人とのつながり自体が、大槌町の「風土」だと思います。何があっても変わらないこの「風土」こそ、大槌町民の愛する大槌町ではないでしょうか。大槌町のこの7年間は、町民一人一人の困難や喜び……本当にさまざまなことの積み重ねだと思います。町民が築いてきた大槌町の「風土」や、一人一人の7年間の歩みを、本誌を読む後世の方々に感じていただきたいです。

木山裕望さん　町民の皆さまが「若者への投資、例えば高校生に町の外に出て成長する機会を提供するなどしたことが、どのような成果を生んだのか」という点に興味を持たれていたことが印象に残っています。まちづくりに欠かせない若者への投資は至極当たり前ですが、不動産などへの投資とは違い、成果は目に見えにくくなります。ハードからソフトの復興へ移行しつつあり、不可視なものを扱っている今だからこそ、以前の若者への投資の成果を共通見解として持つことはかなり重要になってくるのではないか、と感じました。

田中愛也さん　町民の方々へのインタビューを通じて、多くの郷土愛に触れました。それは町の復興を願う気持ちだったり自然や郷土芸能を愛する気持ちだったりするのですが、大槌町にはその思いの下で今を生きている人たちがたくさんいます。そして彼らの姿は、人としての強さという形で私の中に残りました。これは町にとって最大にして最強の資源だと思います。この資源がこれから先も大槌町に残っていくことを願っています。